傍にはホトトギスといふ花があつた。これは點のある紫の花で、砂地の土手に懸崖になつて咲いて居る。また道々には野菊雛菊其他種々の草花があつた。日は暖いので、石地に近い草の上へ坐して、携えて來た辨當を開いて、わたりの草花や、壯大な景色を見て樂んだのであつた。北方に白雪を頂いた富士が青空に屹立して居る。山の手前には低い山があつて、皆スヽキで覆はれて居る。穗の羽毛が銀色の陽炎のやうに輝いて居て、酷く美しい。更に低い山々には楓や其他の木が秋の錦を織なして居る。東方の眸下にはマナヅルの小半島が相摸灣に突出して、この先には太平洋が大島の火山と煙の雲とで遮られて居る。山强ちな海角と入江が伊豆海岸の南方に續いて、再び北方へと轉じて居る。半島の一方には湖水のやうな浦があつて、沼津に至るのである。これから駿河灣が初つて居る。海岸は砂地と砂强ちな稻田とで緣取つてあつて、久能山で終つて居る。箱根への山路は薄や矮い竹や、低い森のある處で、それから下ると箱根の湖水へ出る。湖水は四面山を以て圍んで、暗碧な水を湛えて居る。猶山を越して、程なく、葦の溫泉を過きて、入日の名殘の光線が山の薄に照添ふて居る處を下つて、宮の下の藤屋へと着いた。こゝには美しい天然の溫泉と、美味佳肴とがあつた。宮の下の斷崖の下には、堂ヶ島といふ一小村がある。こゝには瀨音の騷がしい谷川に、動搖する竹の橋が掛つて居る。道のわたりは溫泉の暖かみて常に草が青い、そしてこのわたりに脊の暗綠、淺黃、鳶色、赤等の陸蟹の群が澤山に居て、捕えやうとすると、二ッの紅い爪を振翳して、威嚇する態度をとるのであつた』

日本の道路の端に普通にあるものゝ一ッは、地藏の像である。地藏は佛敎の聖徒で、惱むものを助くるので、殊に旅人と小兒との保護者であるとしてある。箱根と葦の湯の間の路傍に地藏があつた、されば山の天然石に彫刻してあるのであつた。此地藏は弘法大師の一夜の作であると言傳へて居る。此僧侶は日本のあらゆる名山に登つて、說敎の間の隙を偷んで、彫刻、繪畫、書、等をなしたのであつた。路傍にある地藏は慈悲深い顏をした僧侶で、旅人の杖を右手に持ち、左手には手套をして、蓮の花の上に立つて居る。足元には小石が澤山積んである。此習慣を聞くと、地獄の三途川の畔に醜婆があつて、小兒等がこゝを渡らうとすると、醜婆がその衣服を剝いて、永遠に小石を積ませるので、地藏がこれを助ける。それで現世で地藏の足元へ石を積めば、地獄に居る小兒の勞役が輕くなるとしてある。それでわれは地藏の前を過きる毎に必ず賽錢を捧げた。わが處々を徘徊する間を常に守らせ給ふたので、少くともお蔭で愉快な思考も得、好風景や花等の記臆をも併せ得たので。（了）

くらきかげ心にひめて旅にゆく
わがかなしみを君はしらじな

草まくらつゆにはあらでいつしかに
ぬれてつめたきわがなみだかな